

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：小杉善二 幹事：塩村喜代次

情報委員長：米沢修一

1979・10月4日 第150号

“光より影のPRを”

金沢鉄道管理局長 伊能 忠敏 氏



金沢は日本の他の町にくらべて古いものがまだ多く残されている。しかし古い家並が駐車場へと変わるのを見るにつけ、金沢のよい所が少しずつ消えて行くようで寂しい思いがする。

あるフランス人は「日本の町並はどこへ行っても特色、顔がない」と評した。

確かにパリにはパリのストラスブルグにはその町の歴史を物語る多くの建物がある。

ノートルダム寺院やルーブル宮殿は 100年以上の歳月を掛けて造られたもので改造こそすれ、人々は財産として後世に残すべく努力している。それは自分達の町の歴史をよく勉強し、理解しているからこそできるのであろう。

その意味で金沢の人は金沢の歴史をもっと知る必要がある。

金沢は京都、奈良にはないものを有している。日本では数少ない江戸時代の武家文化がそれである。しかし現在の「金沢」は加賀藩の光の部分しかとらえていない気がする。

たとえば辰巳用水の水トンネルに見る土木技術や測量技術、又加賀騒動の大槻伝蔵物語など、当時の加賀藩の悩み、時代的背景を人間の生きざまと共にとらえること、影の部分をも見る必要があるのである。

ドイツの学者、シュリーマンは神話と言われたホメロスの詩「トロイの木馬」の実存を信じ遂にそれを発掘、文明を明らかにした。そして総合的に文化をとらえた結果が、今世界的な観光地となっている。

観光文化とは一つの文明をほり起す事で、一つの庭を見せるものではないとすれば金沢を教養を高める拠点とする努力が今後望まれる。

— 金沢北RC例会講話から — (文責 米沢修一)

私の名刺

小間井 宏尚



この度、金沢北ロータリークラブに入会させていただき誠に有難うございました。

私は現在尾張町の地に3代続いて靴と「お人好し」金沢弁で言えば「こんじょ好し」を売り物にしております。他業界では3代とは決して古いものではございませんでしょうが、靴業界にとりましては、金沢で一番古いと親父から聞いております。

昨年、岡山のロータリアンからさかんに入会を勧められ、その気になり先日9月5日例会に初めて出席させていただきましたが、果たしてついて行けるのかと心配しております。

物事に建前と本音、表と裏がありますように、靴小売業「サロンド・ショッスール コマイ」は皆様がまず目につく表の仕事と言えます。現在私が「お人好し」を発揮している皆様から見て目立たない裏の仕事とは、学校で使われている内履、体育用シューズの改良と普及です。一億総体力作りが叫ばれている昨今、人間工学に基き体育実技においてより機能的に、保健においてより衛生的にしかも経済的なシューズと全国の仲間と手を組み大学の研究室、現場の先生と飛び廻らせていただいております。消費物資は高度成長期においては量産出来、如何に安く生産するか、又、如何に趣好に訴えるかと研究されて来ましたが現在では随所に人間性の回復が叫ばれてまいりました。最初3名とメーカー1社で始めたことが、代理店53社、メーカー韓国も含め4社となりました。そして日本教育シューズ協議会という団体が出来上がり、常務理事を引受け責任の重さを感じております。

金沢で生れ、金沢で育った何も知らない私でしたがちょっとした人との巡り合いにより、ちょっとした興味が各地の大学の先生、各地の仲間と知り合い、人との出会いの不思議さを思っております。私は頭が悪いので先の事も読めませんし、本を読んでもなかなか理解出来ません。体験を通して学習が身につくものだと思っております。人との出会いを求め、何でもやらせていただきたく、この会に入会致しました。よろしくご指導の程お願い申し上げます。

最後に簡単な経歴を書かせていただきます。

昭和16年4月8日金沢に生れ、松ヶ枝小学校、高岡町中学校、泉丘高校、法政大学を卒業。すぐ家業を継ぎ現在に至っております。

講話ごあんない

金沢東RC

- 10月8日 「刑事裁判の話」
名古屋高等裁判所金沢支部
刑事部長判事 辻下文雄氏

金沢西RC

- 10月5日 「主婦の生活と意義」
金沢西RC 辻 義治君
10月12日 岩谷浩三氏
10月19日 台北西RC訪問団
10月26日 「パン業界について」
金沢西RC 山下幸男君

金沢南RC

- 10月9日 「イスラエルをたずねて」
金沢南RC 山本茂君
10月16日 「色彩の話」
金沢美大助教授 山岸政雄氏
10月23日 「アフリカの公園造り」
水野昭憲氏
10月30日 「紳士の身だしなみ」
カネボウ化粧品石川販売
美容課長 松尾道子氏

先人に学ぶ(1)

— ロータリーの原点をたずねて —

柴田 三郎



ロータリーには、卒業はありませんし、古いも若きも、年令に差別はなく、権利も義務も全く平等であります。従って、いつでもロータリーの御用に立たねばなりません。

ところが、私はロータリー26年余、この間ずいぶん、しゃべっても来、また書いても参り、今やもう後備役のつもりでいますので、今日、この演壇に立ってロータリーを語ることに、いささか気おくれがいたし、ご辞退いたしたのでありますが、修練委員長の増江さんからお叱りを受け、とうとう、罷り出たような次第であります。

ところで、私の今日の演題は“先人の学ぶ”ということで、ロータリーの原点をたずね、ロータリーの神髓をさぐって見たいと思うのであります。私のかねて尊敬する偉大なるロータリアンの方々から学んだロータリーの道をも併せて探求いたしつつ、私自身に言い聞かせるつもりで、これからお話を進めたいと存じます。

* * *

ロータリークラブは、単なる社交団体でもなく、また、社会奉仕を主体とする慈善団体でもないことは、今更、申し上げるまでもありませんが、若し、それだけのものであったとしたら、ロータリーは、今日まで永續きはしないで、とっくに雲散霧解していた筈であります。

ロータリーが1905年、明治38年2月、アメリカ、シカゴに誕生し、以来75年になんなんとし、年を追って発展し、素晴らしい活動を続けつつ、今日では、全世界 150カ国余、18,000クラブを越えその全会員数は、実に80万を突破するに至ったのであります。

ところで、この偉大なる持続、発展の秘密は、何でありましょうか。私は、これを追って見たいと思うのであります。

ロータリー誕生当時の目的は、「会員間の職業上の相互扶助と、友好親善」の二つを眼目としてスタートしたのであります。若しそれだけであったら、先程も述べましたように、全世界に及ぶ拡大発展を見ることはおろか、一地域の社交団体としても、とっくに消え去っていた筈であります。

ところが、最初から「会員は一業種一人を原則とする」。「政治上、宗教上の論争を禁止する」。「会務は、互譲の精神と、独裁とマンネリー化を排して、輪番制とする」。「出席をクラブ活動の根本義務とする」など、この四つの取決めが、永續きの一因として無視することは出来ません。しかしそれだけではありませんでした。もっともっと重要な根本的なものが、間もなく加えられたからであります。

* * *

私が、ロータリーに情熱を燃やしていた頃、ずいぶんロータリーの文献を追いつつ勉強して見ました。先づ第一は、ロータリーが誕生した翌年、即ち1906年1月、会員の中から、クラブの目的として「相互扶助と親睦だけでは満足出来ない」という意見が出て、追加されたのが、「シカゴ市の最善の利益を振興し、会員間に市民としての誇りと、忠誠の精神を鼓舞すること」でありました。これは、素晴らしい卓見であり、英智でありました。かくして、追加されたこの一項に刺激されたのであろうか。私はそう見るのですが、1908年にはサンフランシスコに、第二番目のクラブが誕生しました。次いで、オークランド、ロサンゼルス、シアトル、ニューヨーク、ボストンとクラブ創立が続き、やがて全米各州に広がる。大きな原動力となるに至ったのであります。

* * *

